

《追悼 矢崎武夫先生》



故 矢崎武夫先生

矢崎武夫先生を偲ぶ

——その都市社会学の航跡を辿りつつ——

渡 戸 一 郎

1. 矢崎先生との交点と思い出

矢崎武夫先生（文学博士）が2005年1月30日、心不全のため逝去された。享年88歳だった。先生は、慶應義塾大学（1953～1982）を定年退職後、縁あって晩年の8年間（1982～1990）を明星大学社会学科（当時）で教鞭をとられた。また、いわき明星大学大学院（社会学専攻）の開

設にも、ご尽力された。

先生は、奥井復太郎（1897～1965）、磯村英一（1903～1997）、鈴木栄太郎（1894～1966）などとともに、事実上、日本の都市社会学者の“第一世代”として言及されること（中筋2002）からも分かるように、私のような戦後生まれの“第三世代”にとっては、ご著作を通じてか、あるいは私たちの世代の直接の師にあた

る“第二世代”(奥田道大、倉沢進、鈴木広、高橋勇悦ら)の先生方を介して、間接的に教えを受けてきた面が大きいことは否定できない。しかし奇遇にも、私は矢崎先生が本学を退職されると入れ替わりに本学社会学科(当時)に奉職することになり、先生の「都市社会学」講義を引き継ぐという重責を担うこととなった。退任される先生に研究室でお目にかかったとき、緊張して堅くなっている若輩の私に対して、温顔の先生が「自由にやりたまえ」とおっしゃって下さったことを鮮明に思い出す。今となっては遅きに失するが、リベラルな学風をシカゴ大学で吸収された先生ならではの、このあたかな助言に改めて心から感謝したい。

短い期間だったが、先生とは学会活動でも一緒にさせていただいた。日本都市社会学会の第2回大会(1984)は、同学会理事の矢崎先生がおられることから明星大学で開催された(シンポジウム「シカゴ学派再考」)¹⁾。思い起こせば、明星坂を登って私が初めて明星大学を訪れたのはこのときだった。また、1986年に福岡で開催された第4回日本都市社会学会大会のシンポジウム「都市の国際化とは何か」で、私が「都市における『国際化』のイメージ——自治体の政策動向分析を中心に」を報告したときに司会を務められたのが、矢崎先生と鈴木広先生(九州大学)だった。さらに香港大会(1991年)では、香港中文大学で在外研究の経験をお持ちの矢崎先生から、植民都市・香港の都市社会の成り立ちについてご教示を得た。一方、関東都市学会では、たまに理事会に70歳代後半になられた先生が出席されることがあり、新米理事の第三世代の私たちとまったく対等に気さくに話される先生の姿が印象に残っている。また、私が編集担当理事をしている間に、後掲の「矢崎武夫関係文献目録」を含む矢崎都市社会学特集「都市研究における“統合機関説”再考」(『関東都市

学会年報』第3号、2001)を編む機会があり、今となっては改めて不思議なご縁を感じる。

ここに矢崎先生を偲びつつ、そのご研究の航跡を振り返ることにしたい。

2. ライフヒストリーと研究の航跡²⁾

先生は1916年、東京府大田区大森生まれで、ご両親の影響で幼い頃から教会通いを通してキリスト教に親しんでいたという。慶應義塾大学経済学部の学生時代は、経済学理論の抽象性に満たされず、社会矛盾を理解するために社会的存在としての自己を客観的にみていく必要性を認識して、マルクスやブハーリンなどの科学的認識法を学ぶようになっていったようだ。同学部を戦争のため繰上げ卒業後、東芝に入社されたが、まもなく入営し、中国戦線で幾度となく凄惨な場面を経験されたという。

敗戦後復職した東芝では、英語力をかわれ、翻訳に携わっていたが、メソジスト教会からアメリカ留学生に選ばれ、渡米。シカゴ大学大学院で「アーバニズム理論」の提唱者ルイ・ワース教授に師事し、3年(1949—1952)にわたって都市社会学を学ばれた。その間、都市社会学の生態学、とりわけR. D. マッケンジーやA. ホーリーらの新人間生態学派の研究に強く関心をもたれ、統計学の重要性、および社会学と人口学、地理学との結びつきを強く実感したという。

帰国後の矢崎先生は、「著作目録」にあるように、アメリカ都市社会学の批判的摂取のうえに、日本都市の社会学的分析作業に精力的に取り組まれ、『日本都市の発展過程』(1962)とその英訳版 *Social Change and the City in Japan* (1968) を刊行された。後者は日本発の都市社会学の国際的水準の研究として、欧米の研究者にも好意的に迎えられ、広く取り上げられたことは、つとによく知られているところで

ある。

さて、都市社会学における矢崎先生の研究は、大きく3つに分類できよう。すなわち、第一にシカゴ学派の人間生態学的アプローチの批判的検討にもとづく日本都市の発展過程の研究、第二に大都市圏、とりわけ東京の生態学的構造の研究、第三に香港及び東南アジアの都市化の研究である。これらは、相互に深く関連しあいながら展開された。

1) 統合機関説

第一の研究からは、全体社会体制の中核をなす統合機関が都市形成の基盤だとする、権力論を基礎とした独自の「統合機関 (Integrated Organ)」説が展開された。「統合機関」説は、日本都市の歴史的な実証研究としての『日本都市の発展過程』(1962)と『日本都市の社会理論』(1963)の二著において提唱され完成された。これは、都市の中核を「空間的交通網」における「結節機関」だとした奥井復太郎や「社会的交流」の「結節機関」だとした鈴木栄太郎の議論をさらに推し進めたものとして、すでに斯学の学的遺産となっている。少し長くなるが、矢崎先生に教えを受けた慶応大学の藤田弘夫氏による解説を引用してみよう。

矢崎は都市を、一定の地域に、一定の密度をもって定着した一定の人口が、非農業的生産活動を営むために、種々の形態の権力を基礎に、水平的に垂直的に構成された集落であると定義する。その際、都市は、特定の政治、軍事、経済、宗教、娯楽その他の組織を通じて、広範な地域と結合し、農村の余剰を時代や社会により異なった種々の形態で吸収することによって可能になるが、都市はこの組織を運用するため、相互に関連したそれぞれの「統合機関」が中核をなし、人口は権力的に

構成されたこれらの機関に直接的あるいは間接的に関連して、高度の分業に引き入れられ、それにとまなう種々の派生文化をもち、全体は多く形式的に統制された水平的・垂直的な構成体をなしているという。

都市の核を統合機関とする矢崎武夫の説は、都市を社会的交流の「結節機関」だとする鈴木栄太郎の説と近い。しかし統合機関と結節機関は幾多の点で異なっている。結節機関は農村のニーズの側から都市の成立を見ている。その結果、結節機関の描く都市は一面的で、きわめて静態的で牧歌的な様相を呈している。これに対して、矢崎の統合機関理論は、権力的視点を明示的なものとするとともに、都市に立地する機関が積極的に他の都市や農村を統合しようとする側面にまで、分析を広げようとするものである。

都市の政治、経済、宗教、教育などの機関は、それぞれが独自の目的を達成するために、多種多様なコミュニケーションを介して、自己の立地する都市はいうにおよばず、他の都市や村落に積極的に働きかけている。統合機関理論は結節機関を動態化することで、同種間であれ、異種間であれ、機関相互のきびしい緊張や激しい闘争を積極的に組み込みながら分析しようとするものである(藤田 1995: 235)。

このように、矢崎先生の統合機関説は、いわば「権力が都市を発生させ、権力の所在が都市である」という見解であり、シカゴ学派の「独立変数としての都市」の継承というより、むしろそれを逆転させて、「従属変数としての都市」に主眼を置いたものであることがわかる。すなわち、「都市の多様性を生み出した源泉である全体社会体制に焦点を移し、全体社会の構造が都市に及ぼす影響を分析する」(松尾・柴田

2001) という方法論的視角である。ここからは、「社会的実験室」シカゴに強く引照したシカゴ学派都市社会学の限界を乗り越えて、通文化的・通歴史的な普遍理論として都市論を組み替えようとした先生の意図と意気込みがうかがえよう。

2) 大都市論

第二の、大都市圏、とりわけ東京の生態学的構造の研究についてみよう。この研究の背景としては、先生が昭和30年代に、東京市政調査会からの各種委託調査をはじめ、首都圏整備計画における審議会専門委員や諸都市の都市計画委員を務められたことがある。当時は、グリーンベルトを大きくとった大ロンドン計画をモデルとする首都圏整備計画の第一次計画(1956)の理想が、計画当初からの各方面からの軋轢による事業の遅れに加え、急速な都市化を前に「流産」し、より現実追認的な第二次計画策定に方向転換せざるをえなくなっていた。そこでは、「成長抑制か巨大都市肯定か」という都市観の対立、すなわち、新産業都市建設法や広域町村圏構想など、「官」による巨大都市抑制論プラス地方都市圏育成論と、都市集積を歓迎する経済界や大都市再開発を夢想する一部建築家など、「民」による大都市肯定論との対立があった。こうした中で矢崎先生は、「大都市圏(首都圏)の高い政治・経済的ポテンシャル・強い求心力を、従前からのさまざまな調査によって実証的に明らかにし、さらにそれを「統合機関」という概念によって呈示することによって大都市必然論を支持した」(川西・土居 2001)という。『都市問題』誌上に掲載された論文「東京の生態的形態」(1954)や「全国都市地域の人口増加と地域構造の変化過程」(1958)には、当時の先生の実践的な問題意識と大都市圏分析の苦闘の足跡が残されている。

3) 東南アジア都市研究

最後に、香港及び東南アジアの都市化の研究であるが、その直接の契機となったのは1975年から翌年にかけて香港中文大学の在外試験官としての赴任であろう。在外試験官とは、学生の公平な評価を行うために外部から教員を招聘する制度であり、先生にとって香港滞在がアジア都市研究の重要性を認識する大きな機会となったことは想像に難くない。帰国翌年の「わが国都市発展の特徴」(1977)では、対象に即した研究方法の必要性を再確認されるとともに、「統合機関」の概念を用いた、香港や東南アジアの都市化の歴史的過程に関する論文が80年代に次々に発表される(『明星大学社会学紀要』に書かれたものを含む)。それらをまとめたのが『国際秩序の変動過程における発展途上国の都市化と近代化：東南アジアの事例』(1988)である。この研究は、今からみれば、ポストコロニアル・シティ研究を先取りする視角を含むものと評価されよう。

3. おわりに

周知のように、1980年代以降、都市をめぐる状況は大きく変化してきている。一方では、「世界都市」論にみるように、先進資本主義諸国の大都市の中心性、中枢機能および都市間関係が、グローバルな文脈で学問研究の俎上に取り上げられるようになった(渡戸 1991)。他方では、発展途上国の都市化がその速度を高め、人口・産業・雇用・住宅・都市環境などを含む「メガ・シティ」問題の実践的研究が大きな課題となっている(渡戸 1994)。しかし、1960年代に「都市理論の危機」が指摘されて以降、現実の都市理論はますます細分化し、全体性を喪失していく傾向にあるようにみえる。その背景は、ひとつには都市が全体社会化してしまい、

固有の意味での「都市」研究の条件を確定しにくくなったことであり、もうひとつは、都市と全体社会の関係がすでにナショナルな水準のみに留まらなくなり、都市はグローバル／リージョナルな影響を直接受けるとともに、トランスナショナルな性格を強めて、国家を超えたアクターとしても登場してきていることにある。こうした中で、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルの各レベルの変化が、それぞれの異なる速度と方向を衝突させながら、相互にどのように影響しあい、新たな都市社会変動のダイナミズムと諸問題を生み出しているのかを研究するための、全体性を志向する都市研究パラダイムが求められているといえよう。

実は、先に紹介した『関東都市学会年報』第3号(2001)の特集「都市研究における“統合機関説”再考」は、こうした細分化し断片化する都市研究の現状に危機感を抱く若手研究者(第四世代)が中心となって、都市全体を俯瞰する可能性をもった理論として矢崎先生の統合機関説を取り上げたものであった。今後、新たな文脈や視角から矢崎都市論再考がさらに深まることが期待される。

【註】

- 1) ちなみに日本都市社会学会第18回大会(2000)も明星大学で開催された。
- 2) 以下は、西山・上野(2001)、川西・土居(2001)、松尾・柴田(2001)、藤田(1995; 1998; 2005)を参照し、適宜引用参照した。煩雑を避けるため、一部を除き、いちいち詳細な注記はしていない。

【引用参考文献】

川西崇行・土居洋平、2001、「都市社会学者の理論と実践——矢崎武夫と首都圏整備計画／統合

機関説の国際的展開」『関東都市学会年報』第3号

中筋直哉、2002、「日本の都市社会学——都市社会学の第1世代」高橋勇悦監修『21世紀の都市社会学』学文社

西山志保・上野淳子、2001、「シカゴ学派と日本都市論の架け橋——統合機関説の誕生」『関東都市学会年報』第3号

日本都市社会学会編、1986、『都市の国際化とは何か』

藤田弘夫、1995、「統合機関」藤田弘夫・吉原直樹編『都市とモダニティ——都市社会学コメントール』ミネルヴァ書房

藤田弘夫、1998、「矢崎武夫——国際的な都市社会学者」川合隆男・竹村英樹編『近代日本社会学者小伝』勁草書房

藤田弘夫、2001、「今、なぜ、統合機関か」『関東都市学会年報』第3号

藤田弘夫、2005、「矢崎武夫先生を偲んで」『日本社会学会ニュース』184

松尾浩一郎・柴田彩千子、2001、「統合機関説と戦後日本の都市社会学の展開」『関東都市学会年報』第3号

矢崎武夫先生古希記念出版会編、1987、『都市：社会学と人類学からの接近』ミネルヴァ書房

吉原直樹、2005、「矢崎武夫先生を偲ぶ」『日本都市社会学会ニュース』70号

渡戸一郎、1991、「「世界都市」東京論の都市社会学的視座」『明星大学社会学研究紀要』11号

渡戸一郎、1994、「メガロポリスからメガ・シティへ——グローバル時代の巨大都市論の展開と課題」『明星大学社会学研究紀要』14号

(2005年7月19日 脱稿)

(わたど いちろう、本学科教授)

矢崎武夫先生 略年譜

1916 (大正5) 年12月1日	東京府 (当時) 生まれ
1930 (昭和5) 年3月	東京高等師範学校附属小学校卒業
1935 (昭和10) 年3月	第一東京市立中学校卒業
1941 (昭和16) 年3月	慶應義塾大学経済学部経済学科卒業
1942 (昭和17) 年1月	東京芝浦電気株式会社勤務
1942 (昭和17) 年2月	
~1946 (昭和21) 年10月	軍務に服す
1949 (昭和24) 年6月	東京芝浦電気株式会社退職
1949 (昭和24) 年7月	
~1952 (昭和27) 年9月	シカゴ大学大学院社会学科留学
1953 (昭和28) 年4月	慶應義塾大学法学部講師
1955 (昭和30) 年4月	慶應義塾大学医学部専任講師
1957 (昭和32) 年4月	同 助教授
1962 (昭和37) 年4月	同 教授
1969 (昭和44) 年	『日本都市の発展過程』で第1回日本都市学会賞を受ける
1972 (昭和47) 年4月	文学博士
1982 (昭和57) 年3月	同 退職・慶應義塾大学名誉教授
1982 (昭和57) 年4月	明星大学人文学部社会学科 (当時) 教授
1991 (平成3) 年3月	同 退職
1992 (平成4) 年4月	いわき明星大学大学院人文学研究科社会学専攻教授
1995 (平成7) 年3月	同 退職
2005 (平成17) 年1月30日	逝去 (享年88歳)

学会所属

日本社会学会

日本都市学会

日本人口学会

日本都市社会学会

関東社会学会

関東都市学会

注1 矢崎武夫先生が明星大学就任時に記載提出されたものに、その後の職歴を追記、さらにご子息の校閲を得て訂正して作成した。

2 職歴に関しては専任職のみを記載した。このほかに内外の多くの大学で非常勤の講師等を務めていることについては略したことをご了解いただきたい。

矢崎武夫先生 著作目録

1. 著書

- 1962 『日本都市の発展過程』弘文堂
 1963 『日本都市の社会理論』学陽書房
 1963 『都市社会学研究』金文堂
 1963 *The Japanese City: A Sociological Analysis*, San Francisco, CA: Japan Publications.
 1967 『首都圏の社会経済構造とその基礎資料』慶応通信
 1968 『現代大都市構造論：新しい人間生態学的研究』東洋経済新報社
 1968 *Social Change and the City in Japan: From Earliest Times through the Industrial Revolution*, San Francisco, CA: Japan Publications.
 1970 *The Socio-economic Structure of Tokyo Metropolitan Complex*, Social Science Research Institute, University of Hawaii.
 1988 『国際秩序の変動過程における発展途上国の都市化と近代化：東南アジアの事例』慶応通信

2. 分担執筆

- 1958 福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』有斐閣
 1965 磯村英一編『都市問題事典』鹿島研究所出版会
 1974 Livingston, Jon., Joe Moore, and Felicia Oldfather, eds., *The Japan Reader 1: Imperial Japan 1980-1945*, New York, NY: Pantheon Books.
 1993 森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣

3. 翻訳

- 1980 『都市社会の人間生態学』時潮社（監訳、原著はAmos H.Hawley, 1971, *Urban Society: An Ecological Approach*, New York, NY:Ronald Press.）
 1972 『都市と広域』鹿島研究所出版会（木内信蔵と共訳、原著はRobert E.Dickinson, 1964, *City and Region: A Geographical Interpretation*, London:Routledge & K.Paul.）

4. 論文等

- 1952 「人間生態学の発展」『人文論究』2（5・6）関西学院大学
 1954 「都市研究方法の発展」『社会学評論』4（4）
 1954 「東京の生態的形態：上」『都市問題』45（4）
 1954 「東京の生態的形態：下」『都市問題』45（5）
 1954 「社会学における都市研究の課題」『都市問題』45（6）
 1954 「東京の生態的形態：補稿」『都市問題』45（10）

- 1955 「社会学の動向（欧州編）」田辺寿利編『社会学体系 第15巻 総括・索引』石泉社
- 1958 「全国都市地域の人口増加と地域構造の変化過程：上」『都市問題』49（3）
- 1958 「全国都市地域の人口増加と地域構造の変化過程：下」『都市問題』49（4）
- 1958 「私はなぜ社会学を学ぶようになったか」『三色旗』125、慶應義塾大学
- 1960 「東京の生態的形態」福武直編『社会学論集：調査報告編』河出書房新社
- 1960 「我が国人口の都市化と地域構造の変化過程（1920-50）」『法学研究』33（2）、慶應義塾大学
- 1960 「アメリカからの贈り物」『三色旗』145、慶應義塾大学
- 1961 「都市社会の変動に関する地域社会学的研究方法序説」『社会学論叢』21、日本大学
- 1961 「現代社会学の性質」米山桂三編『現代社会学』慶応通信
- 1961 「都市」米山桂三編『現代社会学』慶応通信
- 1962 「東京都と都民生活」『三田評論』606、慶應義塾
- 1962 「日本都市の社会学的分析のための基礎概念」『都市問題研究』14（9）
- 1962 「大都市に於ける都市化」『社会学評論』13（3）
- 1963 「島崎稔・北川隆吉編『現代日本の都市社会』」書評、『社会学評論』14（2）
- 1964 「日本における都市化の推移」『日本文化研究所報』1（3）、国学院大学
- 1964 「日本の大学に就いて：学問と教育の進歩を望んで」『三田評論』630、慶應義塾
- 1965 「都市社会の計画への提言」『高速道路と自動車』高速道路調査会
- 1965 「日本の都市問題：国際的視角から」『都市問題』56（4）
- 1965 「都市社会の計画への提言」『行政管理』16（2）、東京都
- 1966 「都市再開発の問題：東京都心周辺の再開発によせて」『大学院社会学研究科紀要』5、慶應義塾大学
- 1966 「安川正彬著『人口の経済学』」書評、『三田学会雑誌』59（12）慶應義塾大学
- 1967 「都市理論構成の現代的意義」『都市問題研究』19（5）
- 1967 「世界の都市化、日本の都市化と都市問題」『行政管理』18（1）、東京都
- 1967 「首都圏の社会経済構造とその問題点（1）」『行政管理』18（2）、東京都
- 1967 「首都圏の社会経済構造とその問題点（2）」『行政管理』18（3）、東京都
- 1967 「首都圏の社会経済構造とその問題点（3）」『行政管理』18（4）、東京都
- 1967 「首都圏の社会経済構造とその問題点（4）」『行政管理』18（6）、東京都
- 1967 「首都圏の社会経済構造とその問題点（5）」『行政管理』18（11）、東京都
- 1968 「首都圏をめぐる課題」『三田評論』668、慶應義塾（安川正彬・増井健一との座談会）
- 1968 「都市化と繁栄せる都市実現への現代社会の挑戦」『都市問題』59（1）
- 1968 「広域計画の諸問題」『都市問題研究』20（3）
- 1971 「大都市における職場と住居」『三田評論』704、慶應義塾
- 1972 「経済の高度化と都市の巨大化に伴う流通機構の再編成過程に関する都市経済社会学的研究：新しい人間生態学の建設のために」『現代社会と社会学』日本大学社会学科
- 1972 「奥井復太郎著『現代大都市論』」書評、『三色旗』287、慶應義塾大学

- 1973 “The History of Urbanization in Japan,” in Aidan Southall ed., *Urban Anthropology: A Cross-cultural Studies of Urbanization*, New York, NY: Oxford University Press.
- 1977 「わが国都市発展の特徴」『新都市』1
- 1980 「発展途上国の都市問題：香港低所得層の住宅問題を事例として」『法学研究』53（9）、慶應義塾大学
- 1981 「国際秩序の変化過程に於ける発展途上国の都市化と近代化：東南アジア諸国の事例——国際関係の社会学の見地から」『法学研究』54（6）、慶應義塾大学
- 1983 「東南アジアに於ける古代王国の成立と土着都市の形成——人間生態学的アプローチ」『社会学研究紀要』3、明星大学
- 1984 「植民地体制下の西欧化と都市化：東南アジアの事例——国際関係の社会学の見地から」『社会学研究紀要』4、明星大学
- 1984 「日本都市社会学への期待」『日本都市社会学会年報』1
- 1985 「シカゴ学派の都市研究動向——人間生態学を中心に」『明星大学研究紀要—人文学部—』21、明星大学
- 1985 「東京の生態的形態」鈴木広・高橋勇悦・篠原隆弘編『リーディングス日本の社会学7：都市』東京大学出版会
- 1986 「独立後の発展途上国の近代化と都市化：（1）東南アジアの事例——比較社会学の見地から」『社会学研究紀要』6、明星大学
- 1986 「都市の国際化とは何か：地方自治体及び地域住民の国際主義への動向」『日本都市社会学会年報』4
- 1987 「高齢化社会を迎えて」『明星大学父兄会会報』59
- 1987 「発展途上国に於けるプライメイトシティの構造変化と都市問題：東南アジアを事例として」『社会学論叢』100、日本大学
- 1987 「シカゴ学派の都市研究動向：人間生態学を中心に」鈴木広・倉沢進・秋元律郎編『都市化の社会学理論：シカゴ学派からの展開』ミネルヴァ書房

（注） 本著作目録は、土居洋平・川西崇行・松尾浩一郎・西山志保・柴田彩千子・上野淳子によって作成された「資料：矢崎武夫関係文献目録」（『関東都市学会年報』第3号、2001年5月）から未確認文献を除いたものである。